

『山椒魚』の指導に向けて——作品の分析

裴 崢

目次：

- 1 『山椒魚』をなぜ読むのか
- 2 高等学校国語教科書の扱いの検討
- 3 『山椒魚』の構造
- 4 『山椒魚』の作品分析

1 『山椒魚』をなぜ読むのか

井伏鱒二の作品には独特なユーモアがある。そのユーモアは「笑いと泣きが表裏になってい」¹⁾ (松本鶴雄) て、「切々たる哀傷、即ち、人生詩的なペース」が、「微笑と共に忍び込んでくる」²⁾ (浅見淵)。この井伏のユーモアは、処女作『山椒魚』から、「存分に発揮され」、井伏の作品は「『山椒魚』の世界を広め、深めることで一貫してい」る³⁾ (臼井吉見) と指摘されている。

『山椒魚』は、1919年頃、井伏鱒二が早稲田大学に在学中、習作の一つとして朗読会に出したものである。1923年7月『幽閉』と題して同人雑誌「世紀」に発表、1929年5月「内部改正」⁴⁾を加え、『山椒魚』と改題して雑誌「文芸都市」に掲載された。以後再録の際や短編集に収められた時、ま

1) 松本鶴雄『井伏鱒二研究』(明治書院, 1990年), 65ページ。

2) 浅見淵「井伏鱒二」, 小沼丹・他『群像 日本の作家 16 井伏鱒二』(小学館, 1990年), 120~121ページ。

3) 臼井吉見『臼井吉見集』(筑摩書房, 1985年), 212~213ページ。

4) 榎林滉二「山椒魚」, 磯貝英夫編『井伏鱒二研究』(溪水社, 1984年), 135ページ。

た何回も「字句の訂正」⁵⁾、「加筆」⁶⁾などが行われ、さらに1985年新潮社版『井伏鱒二自選全集』刊行の際、作品の終結部が削除された。

誇り高き山椒魚は、繁殖しない黴を「愚か」だと見下げ、付和雷同の徒のような目高達を「不自由千万」だ、と嘲笑する。彼はどんどん発育し、ひとりで岩屋を思うままに占有することができるが、丸二年間のうかつきによって、頭が肥大し過ぎて、これまでの棲家である岩屋から外へ出る自由が剝奪される。狼狽し、悲しんだ彼は空しくも神様に救いを求めもする。ついにはよからぬ性質をも帯びてくる。岩屋に紛れ込んだ蛙を一生閉じ込めてやろうとしてしまう。二匹の間には二年間も激しい罵りあいが続くが、三年目の夏は、「お互に黙り込み」、「自分の歎息が相手に聞こえないやうに注意」する静かな姿で、作品は終わっている。

ドラマティックな山場もなければ、複雑なストーリーもない。しかし、たとえば「寒いほど独りぼっちだ」というような独自の形容、如何にも大袈裟な言葉、山椒魚の不様さを嘲笑してはいけなと呼び掛けながらも、却って山椒魚の苦境をますます際立たせる描写。これらの表現によって、作品に涙と笑いを滲ませ、新鮮で不思議な効果をもたらし、読み手の心を打つ。このような「〔井伏の〕作品でしか表現できない文学の面白さ、醍醐味、微妙な心のひだというもの」⁷⁾（紅野敏郎）を、学習者に触れてほしい。

2 高等学校国語教科書の扱いの検討

『山椒魚』は、「典型的な寓意小説」⁸⁾と見られてもいる。寓話と違って、寓意小説は教訓的な内容を、他の物事にかこつけて表わすものでなくても、他の物事によせて、ある意味を仄めかす役割を持っている。

5) 米田清一『井伏鱒二全集』第一巻解題参照（筑摩書房、1964年）。

6) 米田清一、同上。

7) 紅野敏郎「教材としての井伏文学」、『月刊国語教育』（1986年5月号）、23ページ。

8) 『国語I教授資料』下（光村図書、1985年）。

すると、この作品はある社会状況とそこでの作者井伏のあり方に対する諷刺と取るか、あるいはその状況のもとにおける井伏の孤独とおのれを持する頑固さへの、井伏自身の苦笑いを寓意として持っている、ということになる。動物の世界を借りて、人間社会を描くという手法から、この作品を寓意小説として読んでもさしつかえはない。しかし寓意はストレートに打ち出されていない。必ずしも寓意を強調して読む必要はないと思う。

1994年出版の高等学校国語『新国語二』（第一学習社）の中に、『山椒魚』が採用され、この作品は、「象徴主義の文学作品」⁹⁾だ、と規定されている。『山椒魚』は、山椒魚という動物に仮託して人間的なドラマが展開されているため、この規定の方がより適切だと思う。ただし、文学作品は概してある情緒、感情を象徴的、暗示的に表現しようとするものだ。「象徴主義の文学作品」としてのとらえかたが成り立つかどうかは疑問だ。

当教科書教師用の「指導と研究」には、作者解説、指導のポイント、作品鑑賞などについて述べている。その中で、問題とすべき点は次の3点である。

(1) 「作者」を通じて作品を理解しようとする

「学習指導の要点」として、次のように書いている。

素直な読み、素直な共感 ― それが必要なことであって、その結果としての個々の対象への迫り方を重視していきたい。数学のように一つの答えが出なくてもいいのである¹⁰⁾。

この認識は作品を読む基本的な立場と態度として評価したい。しかしここでは、「なぜ作者が象徴という手法をとったのか」、「象徴的事項がそれぞれ何をどう示そうとしているのか」¹¹⁾、ということを指して論じている。かつ

9) 『新国語二 指導と研究』第9分冊（第一学習社、1994年四訂版）、1ページ。

10) 同上、1ページ。

11) 同上、1ページ。

て早稲田時代の井伏と、その師、片上伸教授との「確執の不幸」に焦点を当て、「山椒魚は片上伸の象徴であり、蛙が井伏自身の象徴」¹²⁾であり、『山椒魚』は「師片上伸への井伏の一つの鎮魂」¹³⁾と説明している。

けれども『山椒魚』を、山椒魚のような閉じ込められた人間を描く作品として、読んでもさしつかえがない。また、その頃における作者の体験、及び作品の時代背景を辿りながら「山椒魚」は井伏自身だと、次のようにも読める。

絵を描くのが好きな井伏はたまたま文学の世界に入った。作品を一つ一つ描いている内に、文学の道で成長してきた。しかし当時日本は激変の時代に置かれ、文学界はやがて左傾化し、まわりの仲間達がほとんどそれに合流してしまった。

ひとりだけ取り残された井伏の孤絶感がまさに山椒魚の心境そのものであるろう。孤独から脱出しようともがいても、流れに左右されることほどいやなことはないと思う氏の信念は、すでに氏の体を束縛する岩屋のように、氏を自由に身動きさせないのだ。『山椒魚』は当時の社会状況における井伏自身の投影ともいえよう。

だが作品を、そのまま作者をおしはかる材料のように読んでしまつては、作品本来のより豊かで、深い意味が損なわれる気がする。『山椒魚』の象徴性は現実の物事や事項などにあるのではない。なにも個別的、具体的なものに限定する必要はないのだ。

(2) テーマを中心にして読む

当教科書では、作品の終結部が削除された『井伏鱒二自選全集』版ではなく、削除される前の筑摩書房版全集の本文をテキストにしている。その理由について、「従来流布していた」¹⁴⁾という事実より、テーマ読みに導くのに都

12) 『新国語二 指導と研究』第9分冊（第一学習社，1994年四訂版），20ページ。

13) 同上，21ページ。

14) 同上，26ページ。

合がよいための選択ではないか、と察する。次に述べられているからである。

山椒魚と蛙の対立から和解に至る部分には、テーマや表現の上からみても重要な意味が含まれており、教材としても有意義であると判断するからである¹⁵⁾。

「重要な意味」も「有意義」も修身的な役割を意識しているのではないか。テーマとする「和解」として読まれるかどうかのも一つの疑問だ。主題が44文字でまとめられている。

長い間の運命的不幸の悲しみ、嘆き、屈託の種々相と、それがやむなくもたらす一種の罪の様相¹⁶⁾。

「的確無比」の構成、「鏤刻の表現」、「底知れぬ奥深さ」を持ち、「昭和文学にそれほど類はないはずである」¹⁷⁾と評しながらも、このようにまとめてしまえば、作品の魅力は感じられなくなってしまう。

また、主題のとらえかたも一面的だ。山椒魚の悲しみも悩みもただ岩屋に何年間ぼんやりしていた結果によるものだ。時代の流れというような運命と無縁の世界にいる。「悲しみ、嘆き、屈託」という言葉は抽象的で、「種々相」といわれても中身がないため、貧弱になってしまう。蛙を閉じ込めても腹一杯ならないし、狭い岩屋から出られない。心ならずも蛙を死に追いやったが、道徳に反した行為を犯した罪とは違う。「やむなくもたらす一種の罪」というのは見当違いだと思う。

『山椒魚』の指導については、数年前、日本文部省教科調査官主催の座談会で取り上げられたことがある。この作品を学んだ生徒の感想の報告によると、「どこかひょうきんな感じがする」という生徒もいれば、「いじめ」とつぶやく生徒もいるそうだ。全体として井伏の作品について、「まったく分からないという生徒と、なんとなくほのかに感じるという生徒と、かなり受け

15) 『新国語二 指導と研究』第9分冊（第一学習社、1994年四訂版）、26ページ。

16) 同上、7ページ。

17) 同上、10ページ。

とめ方が違っている」¹⁸⁾、ということが分かった。これに対して、紅野敏郎が井伏文学の特徴から次のようにこの問題点を指摘した。

打てば響くようなシャープな形で自分の心をつかみとるようには書かれてない、人生どう生きるかという問題、あるいは青春というような問題一つにしましても、明確なテーマ設定¹⁹⁾

がされていなく、また「露骨やセンチメンタルなところを排除していく」という「今の生徒は非常に受けにくい要素」²⁰⁾がある。明確なテーマがなく、抑制されて、いたずらに感情を浪費しない井伏文学の特徴は、同時に生徒の難解に繋がっている。

私は生徒の「かなり」「違っている」「受けとめ方」は、ある面から井伏文学の膨らみを示していると考え。山椒魚は蛙を苛めて、絶望に陥れたように書かれている。それは作品の中でただ一つの場面設定であるに過ぎないが、「いじめ」として読んでも可笑しくはないと思う。井伏文学にはそのような大きさも持っている。

しかしそこに扱っている問題は「孤独」や「寂しい」ことであっても、作品自身は決して暗いものではない。これらの一見皮相な読みから出発しながら、たとえば『山椒魚』の世界を、いかにしてもっとのどやかな形で成立させうるかは、重要な問題である。テーマにこだわることなく、そこに流れている情緒的、雰囲氣的なものをほのぼのでありながら、可笑しくかつおもしろいというような新鮮なイメージとして学習者に感じさせ、理解させる授業ができれば、学習者の読みが楽しくなってくるだろう。

(3) ユーモアを見逃す

表現について、比喩、文語的な表現、翻訳文体、山椒魚の心理状態を展開

18) 「教材としての井伏文学」(『月刊国語教育』, 1986年5月号), 20ページ。

19) 同上, 23ページ。

20) 同上, 31ページ。

する「漸層法」²¹⁾を取り上げている。ユーモアについて、「コロップの栓」という語句を説明した時だけ触れている。それだけでは不十分である。

『山椒魚』は岩屋に閉じ込められた不気味な山椒魚の悲劇を、比喩などによってユーモラスに表現したり、山椒魚自身に評論家的な口振りで語らせたりしながら、その底にペーソスがたたえられ、のどかで、抒情的な雰囲気の流れている。これらの表現手法によって、作品全体の豊かな世界をもたらしたといえる。『山椒魚』を読む際、翻訳文体などに目をつけると同時に、ペーソスを交えたユーモアの表現効果を見逃してはいけない。それらの表現効果を十分に味わって、はじめて作品全体の「的確無比」な構成をより正確に理解できると思う。

たとえば、山椒魚の苦境について、語り手は次のように読み手に呼び掛けている。

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであらうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかったとは誰がいへよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、最早がまんがならないのであるのを、諒解してやらなければならない。いかなる瘋癲病者も、自分の幽閉されてある部屋から解放してもらいたいと絶えず願ってあるではないか。最も人間嫌いな囚人さへも、これと同じことを欲してあるではないか。

「指導と研究」によれば、次のように分析している。

この部分は、語り手としての作者が顔を出しているところで、(中略) 作者が山椒魚に対して深い同情を示す内容で、文章構成の上からいえば小説に変化をつける効果がある²²⁾。

語り手と作者をどう見分けるのか。こうした語り手から作者への変容を確認することは、文章構成上の効果を理解するのに何の意味を持つのか。はた

21) 『新国語二 指導と研究』第9分冊(第一学習社, 1994年四訂版), 2ページ。

22) 同上, 15ページ。

して「山椒魚に対して深い同情を示す内容」になっているのか。いずれも疑問である。

語り手としての作者などは文学作品に存在しない。作者を持ち出すことは作品そのものを読むことには必要がないと思う。なお、この部分を語り手の同情として読むと、ユーモアは感じられなくなる。語り手は一見山椒魚を庇うように呼び掛けているが、一連の極端な比喩から、読み手には「馬鹿なやつだな」と聞こえる。語り手こそ山椒魚を「嘲笑」しているのだ。それを感じると、読み手は思わず吹き出す。吹き出すとともに「しょうのないやつだなあ」と読み手の方から山椒魚への同情を生む。

戸坂潤の述べている「笑いの論理的構造」を現している。語り手は山椒魚を庇うように描写しているが、実のところは山椒魚を皮肉っている。「肯定の側に立つような外見」、いわば「褒めるのはクサすため」のアイロニーである。文章構成上の効果になると、山椒魚を「クサす」ことが読み手の同情を買うことになる。「否定の側に立つように見せかけ」て、肯定するまでにはいかないが、「なごやかな雰囲気」²³⁾をもたらしている。ユーモアの手法である。読み手は山椒魚の間抜けさを笑いながら、辛い境遇を悲しんでいる山椒魚に優しい眼差しも注ぐ。

ここで、先行の研究などを参考にしながら、私の作品分析をし、その作品分析にもとづいて指導案を構成したい。

3 『山椒魚』の構造

『山椒魚』は、主人公山椒魚が自分自身のうかつさから、狭い岩屋に閉じ込められてしまったことへの苦しみ、悩み、辛さ、そのことがどういう心理や行為となってあらわれる——かを描写している。

作品の冒頭から山椒魚は岩屋から抜け出せない孤独な身となっている。に

23) 戸坂潤『戸坂潤全集』第四巻（勁草書房、1982年）、75ページ。

もかかわらず、「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ」と強がる。山椒魚は「相当な考へ」を実行するには、「いよいよ出られない」という実態を十分認識する過程が必要と設定される。

山椒魚は岩屋から外の光景を眺めることを楽しんでいた。やがて小蝦を通して、自分の状況を思い知り、岩屋から出ようと行動を起こすが、無駄であった。途方に暮れた山椒魚は「寒いほど独りぼっちだ！」とすすり泣き、つい蛙を「一生涯」狭い岩屋に「閉ぢ込めてやる！」行動に踏み切る。

だが、蛙を自分と同じような窮境に陥れることによって、山椒魚自身の悲哀が柔らぐどころか、「自分の歎息が相手に聞こえないやうに注意し」なければならぬ、というますます窮屈な空間に狭められてしまう。山椒魚は絶望の淵に徹底的に沈み、最後まで「独りぼっち」であり、「悲しかった」。

作品全体は一行あきによって、7つの形式段落から構成されている。最初の形式段落ではすでに山椒魚の悲しみに至る状態を指し示し、山椒魚と語り手という二つの視点を同時に提供している。山椒魚の悲惨な状況とそれに対する内面的な変化の進行に即して、7つの形式段落を独立させながら、それを重ねることによって、山椒魚の状況を突き詰めて、彼の悲しみを深めていくという構造だ。この7つの形式段落を7つの場面として考える。

『山椒魚』のこの構造にもとづいて、主なプロットを次のように示して置こう。()内は場面によって本文を区切ったものである。

- 場面1 山椒魚の悲しむ状況 ― その状況に対する山椒魚の自信（冒頭から「……うまい考へがある道理はなかったのである。」まで。）
- 場面2 岩屋の内外の状況 ― 山椒魚の思い上がり（「岩屋の天上には、」から「山椒魚は今にも目がくらみさうだと呟いた。」まで。）
- 場面3 小蝦に出会う ― 自分自身の苦境が思い知らされる（「或る夜、」から「全く蝦くらゐ濁った水のなかでよく笑ふ生物はゐないのである。」まで。）
- 場面4 神様にすぎる ― 「寒いほど独りぼっち」とすすり泣く（「山椒魚は再びころもみた。」から「……聞きのがしはしなかったであら

う。」まで。)

場面5 蛙を閉じ込める — 悪党になりさがる (「悲歎にくれてゐるものを、」から「……主張し通してゐたわけである。」まで。)

場面6 両者がいがみ合う — 弱みが相手に見抜かれてしまう (「一年の月日が過ぎた。」から「お前こそ、そこから降りて来い」まで。)

場面7 蛙と対立するまま最期を待つ主人公の絶望 (「更に一年の月日が過ぎた。」から最終行まで。)

4 『山椒魚』の作品分析

前節で示した『山椒魚』の構造を踏まえて、『山椒魚』の作品分析を行う。

場面1

「山椒魚は悲しんだ。」

これは『山椒魚』の書き出しである。短い二文節からなるセンテンスで書き出し、ただちに改行している。しかも「悲しんでいる」という描写ではなく、「悲しんだ」という感覚表現で山椒魚の感情を強調する。

普通、物語の始まりは、まず大まかな時点と場所と登場人物の設定がなされ、描写は作品の冒頭から始まらない。ここではそれらをすべて抜きにして、いきなり登場人物の心理状況の叙述に入る。柳田国男のいうように、「単に或る出来事の叙述を、寧ろ幾分か平板に、素朴にやっつけのける」²⁴⁾手法で、作品の不思議な世界を作り出す。それに動物の山椒魚と人間的な感情を表す動詞の「悲しんだ」と取り合わせると、読み手は、これから悲劇が語られるというより、滑稽で奇妙な感じをする。山椒魚が悲劇の主人公にふさわしいイメージを持たないのに、「悲しんだ」と続くからだ。

なぜわざわざ山椒魚を主人公にするのか。種々様々な動物の中から、外で

24) 柳田国男『柳田国男集』(日本現代文学全集 36, 講談社, 1978年), 10ページ。

もなく山椒魚に選定したのは、頭が大きく、動きが敏捷でないその特徴から、頭ばかりを使ってあれこれと「思ひぞ屈」するものの積極的には動こうとしない絶望的な人間像をイメージさせることができるからであろう。

山椒魚は頭がすっかり大きくなり、うっかりしているうちに岩屋から出られなくなる。無理をして出ていこうと試みると、「頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなったが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であった」。

自然な成長が、思いもかけなく自分をこんなひどい目にあわせてしまう。「発育盛り」や「発育のよい子」などというように、「発育」ということは、よく望ましいことを示す。ここではその望ましい「発育」の結果として、絶望的な事態を招いた滑稽さを表すことができた。

「何たる失策であることか！」山椒魚は初めて自ら顔を出す。頭が出入口につっかかった「狼狽」「且つ悲しむ」山椒魚の独特なポーズに、いかにもインテリ、教養の高い人たちが使う格式ばったせりふでさらに修飾する。

山椒魚は、「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ」とたかを括る。「いよいよ……ならば」という仮定の表現には、山椒魚のまだ極限に至らない状況認識の甘え、自分の「失策」を認めはするが、解決する力があると信じ込む愚かさを表す。

そこで、語り手は間を置かず、「しかし、彼には何一つとしてうまい考へがある道理はなかったのである。」とあっさり、かつ完全に彼の解決能力を打ち消してしまう。語り手は山椒魚の哀れな苦境を、読み手に説明しながら、山椒魚の状況認識の甘さ、自分自身に対する思い上がりを容赦なく指摘するのである。山椒魚の現実の断面を語り手として鮮やかに切り取り、浮かび上がらせる。これによって、山椒魚の悲劇性を告げると同時に、語り手の冷静で客観的な立場もはっきりと示すことができた。

場面 2

山椒魚は目高達の泳ぎぶりをじっと見ていた。多くの目高達は、「藻の茎

の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、「群をつくって、互に流れに押し流されまいと努力し」、一匹きだけが大量の仲間から「自由に遁走して行くことは甚だ困難である」ようだ。

この段落は様々な表現で目高達の泳ぎぶりを描いている。一匹が誤って違う方向によろめくと、他のものはいっせいに誤ったものの方に付いていく。所詮動物の可愛らしい動きだけなのだが、人間社会にある付和雷同のやり方ではないかと思われて、笑いを誘う。

山椒魚の性格はいたってのんびりと観察しているように描かれている。彼は自分の認識の足りないところを棚に上げて、他人をからかうことによって、自分が優越者たることを宣言しようとする。しかし一体だれが不自由なのか。だれが劣等者の立場にいるのか。洞窟から出られないことを知っている読み手こそ、優越感を持って山椒魚を、山椒魚の愚かな見当違いを笑う。

山椒魚は一片の白い花弁がだんだん渦の真ん中に吸い込まれていくのを見た。「山椒魚は今にも目がくらみさうだと呟いた。」語り手は、行を改めて、山椒魚の独り言を聞き逃さずに読み手に伝える。語り手は山椒魚のすべてを知り尽くしているようだ。山椒魚はどんな世界にいるか、語り手は山椒魚の目を通してつぶさに描写する。これを読むことによって、読み手は山椒魚の状況、それらに対する山椒魚の感情などを目に見えるほどくっきり受け取ることができる。

このくだりは物語のストーリーとは一見離れているようだが、紅野敏郎が指摘しているように、山椒魚の「狼狽」すべき境遇と対照されて、「ある幽閉された状況というものが和ら」²⁵⁾げられている。狭い岩屋に閉じ込められているが、一旦広い外の世界に目を向けると、初めてある新鮮で、明るい世界が見えるのだ。自然の風景、小動物たちの活動に対する山椒魚の感覚はまた如何にも知的なものだと感じられる。

25) 紅野敏郎「教材としての井伏文学」、『月刊国語教育』(1986年5月号)、28ページ。

しかし、たとえ新しい世界を発見したとしても、所詮は窖の中だ。山椒魚は岩屋の中にこのままじっとしているほかはない。

場面3

そこへ、或る夜突然一ぴきの小蝦が岩屋の中に入ってきた。孤独な山椒魚には、小蝦の到来は刺激であって、この最初の侵入者を大事にしたいものがあった。自分の「横っ腹で何をしてゐるのか」を知りたくても、「体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしま」う恐れがあるので、ふりむいてみることを「我慢した」。「だが、このみもちの虫けら同然のやつは」、自分の横っ腹に「卵を生みつけ」、「さもなければ、何か一生懸命に物思ひに耽つてゐたのであらう。」と思うと、山椒魚はじっとしていられなくなる。

「さもなければ」は本来AかBかを、平面上の選択として結びつける言葉だ。しかしここでは、Aは「卵を産みつけて」いる蝦の客観的な状況だが、Bは「何か一生懸命に物思ひに耽つて」いるというのは山椒魚が考えた蝦のイメージだ。「さもなければ」は平面上の対等な表現をつなぐ言葉になっていない。

またAは「卵を生みつけ」る生物的存在の蝦だが、Bは「何か一生懸命に物思ひに耽」る人間にたとえられているとも考えられる。蝦の習性と人間の特性とを同じ性質のものとして結び付けることで、蝦もなんとなく人間めいて見えてき、作品そのものの立体的な面白さが出てくる。

「くったくしたり物思ひに耽ったりするやつは、莫迦だよ」と山椒魚は「得意げに」なり、「どうしても岩屋」から脱出しようと「決心した」。自分はそんな「莫迦」ではないことを証明すべく、行動を起こしたのだろう。山椒魚は突然水の中で運動し出したため、水が濁った。

不意をつかれて小蝦は「狼狽」してしまう。しかしすぐあとによりうろたえた山椒魚が見えてくる。「岩石」や「棍棒の一端」と思われていた山椒魚が、突然「コロップの栓となったり抜けたり」するようになる。それを見て、小蝦は堪え切れず「ひどく失笑してしまった。」

山椒魚は真剣に出ようと四苦八苦しているのに、他者から見れば意味を成さない。この間の落差によって、叙情性を生み、ユーモアを帯びてくる。また前句の小蝦の描写からすぐ「蝦」という一般的な概念になり、抽象のレベルを上げているところも面白い。

山椒魚自身が、「みもちの虫けら同然の」小蝦の笑いの対象とされてしまう場面を通して、山椒魚の値打ちを何らかの意味で下げられる効果になる。笑われた山椒魚は、面子が潰され、自分自身の価値の下落になる。一方、笑われるものは一種の失敗者であることを物語るが、または精神的な刺激、あるいは損害を受ける被害者でもあるため、読み手の笑いを誘うと同時に、同情も呼び起こす。

場面 4

山椒魚は何度も岩屋から抜け出そうと試みたが、無駄であった。もはや苦境から永遠に脱出できないことを悟った山椒魚は、ようやく現実の厳しさを直視することができた。彼は涙を流して、神様に助けを願う。

「ああ神様！ あなたはなさないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしてゐたのに、その罰として、一生涯この窖に私を閉ぢこめてしまふとは横暴であります。私は今にも気が狂ひさうです」

山椒魚は「涙がながれ」るわけがない。水の中にながれても分からない。ナンセンスだ。しかし、山椒魚が真剣に悩んでいると書かれると、笑いとともに同情を誘い、神様に泣きすすがる山椒魚の無自覚さ、可愛らしさも感じさせられる。

山椒魚は「どうして私だけがこんなにやくぎな身の上でなければならないのです？」と神様に心中の不満を訴える。尊大ぶった山椒魚は初めて自分を他の動物と並んで考えるようになり、そこから自分だけの悲惨な状況に気が付かざるを得なくなる。「だけ」という言葉の限定によって、後に彼が蛙を自分と同じ状態に置く動機と結び付け、「相当な考へ」を実行する過程を予告する。

神様に助けを求めても、甲斐がなかった。他の生物の生き生きとした姿、蛙の水面から水底まで、また水底から水面までの「勢ひ」よい泳ぎぶりを見て、山椒魚は素直に感動し、自分の惨めさも見えてきたようだ。しかし、そのまま認めたくない彼なので、その屈託を追い払うように目をつぶってみた。目を開けないのは山椒魚にとって珍しいことだ。彼は自分のことを「譬へばブリキの切屑」だと思い、無性に悲しかった。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬へてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思ひに耽ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭ったりして、彼等ほど各々好みのままの恰好をしがちなものはないのである。

語り手は山椒魚の悲劇的な状況を描写するのだが、一方もってまわったおおげさで、独断的な言葉や実証したがる口調とわけ知り顔で語り、しかもこれは如何にも分かりにくいくだりである。

「各々好みのままの恰好をしがちな」「彼等」は、一体「不幸にその心をかきむしられる者」を指すのか、それとも「ブリキの切屑」を指すのか、曖昧である。恐らく後者だろう。「たしかに」は絶対ではないが、多分という意味として、前の文を受けて、それなりに具体的な証拠を挙げて説明する。こうして「ブリキの切屑」とまったく同じ様子ではないかと心得ると、読み手は思わず笑ってしまう。

「ブリキの切屑」などは、到底思いつかないたとえ、奇想天外な表現だが、中身は痛ましい。なぜその考えを持ち、それぞれの恰好で耐えているのか。山椒魚の状況は「いっそう重々しく、普遍的なものにみえてくる」²⁶⁾。普通の言葉で気がつかないような新しい見方を示してくれる適切な隠喩である。

山椒魚にはただ目を開いたり、閉じたりする自由しか残されていない。彼

26) ウィリアム・エンプソン『曖昧の七つの型』（岩崎宗治訳、研究社、1985年）、319ページ。

は目を閉じると、「合点のゆかない」「巨大な暗やみ」に溺れそうになると感じ、彼はもはや悲しみのどん底に落ち込んでしまう。語り手は「……牢獄の見張人といへども、よほど気難しい時でなくては、終身懲役の囚人が徒らに歎息をもらしたからといって叱りつけはしない。」と再び読み手に山椒魚に対する理解を求める。

しかし、目を閉じると、「合点のゆかないことが生じ」という「常識に没頭する」山椒魚のことを「軽蔑しないでいただきたい」と丁寧に願う言表は同情しているようだが、目をつぶると、何も見えないのではないかと山椒魚を馬鹿にする響きも伝わってくる。すると逆に一層の滑稽さを誘う。語り手は辛い、悲しい思いをする山椒魚を軽蔑しないでといいながら、山椒魚をすっかり見くびっている。

語り手は超人的な存在だ。岩屋の中、水の中、小蝦の動きから、山椒魚の心理状態から、自由自在にどこからでも、どんなことでも事態を見通す。身を寄せるほど山椒魚の心境を告白したり、山椒魚の苦しみ、悩み、悶えを訴えたり、熱っぽく読み手に山椒魚に対する理解を求める。

語り手は一定の距離から山椒魚の苦境を眺めて語るが、時折山椒魚のすぐ近くに耳を傾けて語っている。皮肉で嘲笑的な語り手のことばと、皮肉どころではない山椒魚の途方もない嘆きが同時に交錯している。語り手は第三者、山椒魚と違う別の立場から、彼の「悪党」になるまでの経緯を示すのだ。

語り手が顔を出せば、視点は山椒魚だけに据えられなくなり、もう一つの視点を読み手に与えることができる。この二重視点の交差転換によって、読み手は山椒魚に密着して同情したりするとともに、時々語り手になって、山椒魚を客観的に眺めることもできるのである。

読み手を作品の世界の中にすっぽりと取り込んでしまう狙いとも思われるが、一方作品に多重性を持たせ、奥行きのある世界を見せる効果にもなる。滑稽感のあるグロテスクな山椒魚の悲劇的状况について、大まじめにあらゆる証明を並べて、まったく極端な比喩、想像も付かない様々な評論家的な言

葉で断定すればするほど、読み手は、山椒魚の悲劇をまともに受け止めて、涙をもらす気にはならないが、思わず苦笑いをさせられる。

「ああ、寒いほど独りぼっちだ！」と山椒魚は孤独の悲鳴をあげてしまう。山椒魚の感傷的な独白だが、またハムレットのようななかなか洒落たセリフにも聞こえ、哲学者の深い感懐とも思われ、読み手の笑いを誘う。すすり泣きまでを洩らした山椒魚は絶望の淵に落ち、もはや孤独でいることには耐えられなくなる。

場面5

悲歎にくれてゐるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。

ここでは、直接「悪い」、「悪い性質」と決めつけずに、「よしわるし」、「よくない性質」、また「来たらしかった」と書かれている。語り手によるあからさまな罵倒とは異なり、余裕を持っている表現だ。山椒魚は愚かであるが、根は悪くはなかった。しかしやむを得ない原因で悪くなった。ここの表現を裏返せば、いっそう救いのない状況に進んでいることが強調されている。

なおここはナンセンスにも思える。理性的な判断力とか道德の束縛とか、ここにはもはやない。それらのものから解放されてしまう。「相手の動物を、自分と同じ状態に置くことができるのが痛快であったのだ。」と書いているように、山椒魚は、ここからある快感を覚えた。子供の目茶苦茶な世界、理屈も意味も欠如した世界の中に飛び込んだような「痛快」だったろう。読み手もそのような解放感によって笑うのであろう。

悲しみに暮れた山椒魚は、心の不平と怒りを無辜の蛙にぶつけ、「一生涯ここに閉じ込めてやる！」とうっふんを晴らした。この呪いは、山椒魚のすべての悲しみ、悔しさなどを凝縮している。「悪党の呪ひ言葉は或る期間だけでも効験がある」ように、自分よりもっと惨めなやつがいると、救われる気がする。しかしそれは惨めな苦境を徹底的に変えることはできず、苦しみ

の中での束の間の快感に似たものであり、「悪党」の行為には一種のペースが含まれてくる。

「お前は莫迦だ」「お前は莫迦だ」両者はまったく同じ言葉を繰り返すが、中身は違う。蛙は安全な場所にいる。出て行くか行くまいか、自分で決める。山椒魚に見張られている以上、蛙は出ていく筈はないのに、「出て来い！」と山椒魚は怒鳴る。だから、そんな山椒魚は「莫迦だ」というのだ。蛙の自然にしたがう姿勢だ。

山椒魚は蛙を追い詰めて食う目的に達成できず、「よろしい、いつまでも勝手にしろ」とやむを得ず相手を閉じ込めることにする。相手を食う山椒魚の本来の姿ではなく、「お前は莫迦だ」と蛙を罵り返しても、中身のない強がりに過ぎないと読み手の笑いを誘う。悲しみから相変わらず脱出できない山椒魚の状況はいつそう鮮明に浮かんでくる。

場面6

一年がたった。「初夏の水や温度は、岩屋の囚人達をして鉱物から生物に蘇らせた。」「水や温度」、「鉱物から生物」へなどの表現は、一見客観的、科学的な叙述になる。このような厳密そうな書き方は、物語そのもののナンセンスの設定と対比することによって、一種のユーモアをもたらす。

冬眠から目が覚めると、両者の口論が再び始まる。「お前こそ頭がつかへて、そこから出て行けないだらう？」蛙はずばりと山椒魚の痛いところをつく。前回は食われないための保身的な立場だったが、今度はその相手を押し攻めることのできる攻撃的な立場に一転する。「お前だって、そこから出ては来れまい」。山椒魚は精一杯立ち向かうが、どこか「すでに相手に」致命的な弱みを「見ぬかれてしまっ」たものの悲壮感が聞こえないわけにはいかない。

一年たっても、両者は対立のままである。

場面 7

『井伏鱒二自選全集』における『山椒魚』の終結段落は次のように書かれている。

更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の歎息が相手に聞こえないやうに注意してゐたのである。

場面 7はこの二行半によって、山椒魚と蛙の最後の状態を示し、物語の幕を閉じる。「二個の生物」は何故「お互に黙り込んで」いるのか。何故「お互に自分の歎息が相手に聞こえないやうに注意して」いるのか。これは相手を見無視するためなのか、あるいは相手に対する配慮なのか、あるいは相手から侮辱されないために意地を張るのか、そのいずれかの判断は読み手に任されているようである。

なお、このラストシーンは、これまではさらに十数行があった。それが以下のように続いている。

ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い歎息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息をそそのかしたのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上のほうを見上げ、かつ友情を瞳に込めてたずねた。

「お前は、さっき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返事をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もうだめなようか？」

相手は答えた。

「もうだめなようだ。」

よほどしばらくしてから山椒魚はたずねた。

「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」²⁷⁾

この部分があった場合となかった場合とによって、イメージが違うだけでなく、あった場合でも、読み手の予想の仕方によって、意味が大きく変わり、解釈が分かれてくる。

激しい争いから静かな「歎息」になるのは、自分の置かれている状況に絶望を示す。にもかかわらず、「歎息が相手に聞こえないやうに注意してゐ」なければならないほど、両者は相変わらず対立している。それなのに、蛙は不覚にも「歎息」を「もらしてしまった」。それを聞いた山椒魚は、「お前は、さっき大きな息をしたろう？」と確かめ、「もう、そこから降りて来てもよろしい」と悪業の終結を告げる。

山椒魚の「友情を瞳に込めて」という描写に注目すれば、二年もともにこの狭められた空間を過ごしてきた相手に、ほのぼのとした理解の息づかいが流れ始めたと言えよう。しかし蛙はすでにそこから出てくる力がない。両者の間はしばらく声がなかった。再びこの静かさを破ったのは、山椒魚の言葉である。

「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」

山椒魚は死に瀕する蛙の心の動きが気にかかる。同じ窘で生きている仲間に対する思いやりの表現が見られる。ではこのやりとりには山椒魚の心理はどうなっていたのだろうか。仲間同士の感情が芽生えるが、どうして蛙が死にまで追い込まれたか、と原因を追究すると、わが身の責任が問われてくる。

27) 井伏鱒二『山椒魚・遙拝隊長』（岩波書店、1980年）、14～15ページ。

にもかかわらず、できたら憎まれないでほしい。自分のことを許してほしい。「お前は今……ようなのだろうか？」と言ったのは、蛙は自分を責めているのかどうかをさぐると同時に、俺のこと憎んでいるね。俺は悪かった。許してくれ、と期待する。山椒魚は蛙の答えをはらはらして待っていたらう。

ところが蛙は「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」と答えた。蛙の「きわめて遠慮がち」な答え方は、山椒魚に対する気づかいに見られる。その読みを踏まえて答えの内容を考えれば、山椒魚の問いに隠された意味を、蛙は十分読みとって、正確に答えたと理解できよう。

こうして両者の間に、山椒魚の自責と蛙の思いやりによって、静かな愛が生まれ、安らぎの一時を迎え、恨んだり、抗争したりすることを経てから、どうにもならない現状をともに受け入れるため、結ばれた両者の痛ましいいたわりを示す和解の結末として読み取ることができる。

一方、「お前は、さっき大きな息をしたろう？」と待ちに待った相手の不覚に対して、山椒魚は一種の勝利感をもって尋ねたとも考えられよう。「それがどうした？」という反問も蛙の精一杯の抵抗を示す。「そんな返事をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」まるで敗者に対する勝者の恩恵のようなものだ。

蛙は「空腹で動けない。」と山椒魚の恩を買おうとしない。「それでは、もうだめなようか？」との山椒魚の問いに、蛙は「もうだめなようだ」と答え、自分の事態をきちんと認識している。山椒魚は自分の行動が結局蛙を死に陥れるに過ぎないものであるということに、なんとなく気づき始めていたところだったのである。蛙に恨まれているかもしれないと思った。山椒魚は、「お前は今どういうことを考えているようなのだろうか？」と蛙の心中を探ろうとした。反省も和解も直接に示されないせりふだが、もし蛙は責めてくれたら、「すまなかった」というつもりがあるかもしれないニュアンスを漂わせているとも思う。

「今でもべつにお前のことをおこっちはいないんだ。」と言ったように、蛙

は自分を閉じ込めるということでは、悲しみを紛らわすことができなかつた山椒魚がその無意味さに気付いていなかった愚かさを見抜いていた。だが、自分の本当の気持ちを山椒魚に言おうとしない。言ったら山椒魚を軽蔑することになる。山椒魚を軽蔑しても自分を解放することができず、山椒魚にいまさら謝ってもらっても、自分の事態はよくなるわけではない。蛙は山椒魚をずっと無視していた。

山椒魚にとっては、謝れば、それによって、心の一つの解放、救いを味わうことができる。いわば自分の謝ったことによって、相手は許してくれると思ったかもしれない。しかし、蛙は山椒魚を許さないで死んでいく。残っているのは山椒魚だ。蛙に対する自責の念は段々深まっていくしかない。限られた空間の中で、自分のしたことの恐ろしさ、辛さをひとりで味わっていく。山椒魚の完全な絶望へと落ちていくことを匂わす結末である²⁸⁾。

山椒魚の言葉は「どういうこと……」と問い掛けるかたちで切り出すが、「なのだろうか」によって、内容から自問の形式になる。この曖昧で食い違う表現は、山椒魚の苦悩を控え目に伝えるとともに、おかしさを持たせる。蛙の答えは健気そうなだけに、何とも哀れに聞こえる。

素朴さと暢気さとマジメさと無邪気さを醸し出す一方、両者の涙も十分感じられるやりとりである。「登場者の心を簡単に作者が説明せず、しかも描写に迫力をもたせるのに非常に役立つ」²⁹⁾ (林四郎) 対話の型である。対立のままにせよ、一時の「和解」にせよ、両者の悲惨な状況には変わりはない。当事者たちが真剣であることと、それによって際立たされるこの絶望的な状況は、一方で作品に滑稽をもたらしている。

ところが、この十数行を削除すると、イメージはどう異なってくるだろうか。

28) このような読みは、1990年山川和長の『文学作品指導 山椒魚』(北海道大学教育方法学講座卒業論文)によった。

29) 林四郎『文章表現法講説』(学燈社、1969年)、253ページ。

やがて三年目の夏を迎えてくる両者は、疲れてしまい、いがみあいなくなる。歎息がするが、相手に聞こえないように気を使う。弱みを見せれば、相手が喜ぶわけだ。それができない。意地の張り合いが続く。

短い二行半に「お互に」という言葉が二回も出ている。依然と虚勢を張り通す両者だが、それまでの「俺」と「お前」の断固とした対立から、「お互に」という相互的な新しい認識に変わることを意味する。

蛙にとっては、否応なしに狭い空間を共有していくしかない諦め、山椒魚にとっては、まさに望んでいた道連れができたのではないか。

山椒魚は、自分だけ惨めだと、「寒いほど独りぼっち」で耐えられない。蛙を狭い岩屋の仲間に引きずり込んで閉じ込めることによって、「ある期間だけでも」慰めを得られる。課せられた不遇によって、自分の弱音を相手に聞かせないように最後まで意地を張っていかなければならないが、もう孤独の味わいとは全然違う。蛙と一緒にいれば、もはや落涙もすすり泣きもない。

「お互に」という状況なので、「独りぼっち」ではなくなる。にもかかわらず、自分自身を不幸から根本的に救い出すことはできない。蛙も閉じこめられてしまった現実を受けとめざるを得なくなるが、両者は許し合うことができず、対立のままであった。死んだような静まり返った中に置かれる両者のシーンが、くっきりと読み手の目の前に浮かび上がってくる。そして冒頭から悲しいほどにばかげた山椒魚は、こうして最期までも、「不自由千万な」辛さを味わう姿勢であり続ける。

二つのラストシーンはどちらがいいか悪いか、作者はそれを削除する権利があるかどうかについて、読み手にとってはほとんど議論の余地はない。しかしそれがあつかないかによって、作品上それぞれどんな違うイメージを持たせるかを、十分味わう必要がある。この違う効果の味わいによって、文学作品を読む楽しい体験にもなろう。鈴木貞美がこの改稿をめぐって、次のように語っている。

これまでの『山椒魚』と今度の『山椒魚』と、……読者は読み比べ

て、どちらか好きな方を選べばいい。……これはなかなかぜいたくな楽しみではないか³⁰⁾。

なお、最終段落がカットされてからの味わいとしては、静寂の世界に導かれる特徴があるといえよう。

『山椒魚』は、山椒魚の物語を通して、岩屋に閉じ込められて、そこから永遠に抜け出せない窮地に置かれた山椒魚の行為と心理の屈折を描いている。

語り手が山椒魚の悲劇的な事態を直接に読み手の前にさらけ出すが、岩屋に閉じ込められた当事者はただちに絶望に陥ってはいない。「何たる失策であることか!」「なんといふ不自由千万な奴等であらう!」など、と言いつ張ったり、威張ったりしている。こうした山椒魚の「漢語調」の「詠歎」³¹⁾ (鈴木秀一)によって、間抜けなことを悔やみながら、他の動物より自分の方が結構なものだと尊大ぶった山椒魚の性格が浮き彫りにされる。一方、その悲しみをぼやかし、読み手の笑いさえ誘う。これは作品の構造によって必要とされたものだと思う。

語り手もそのまま山椒魚は馬鹿だとかと指摘せずに、彼の尊大さを意味付けるエピソードを挙げている。そのことによって、読み手に微笑させたり、失笑させたりする。蛙を絶対外に出さない気持ちもよく分かる。そういうことをしてもおかしくないための描写として、山椒魚の尊大さ、嫌らしさ、凶々しさが描かれているわけだ。語り手は山椒魚を嘲笑しても、読み手はそこから押しつけがましい教訓性や寓意を感じない。

読み手は、山椒魚の失敗、間抜けを嘲笑しながら、さまざまな弱点と未熟さをかかえ、不運に見舞われてばかりいる山椒魚をむしろ優しく受け止めて

30) 鈴木貞美「非情の完成——(新潮社、1986年2月)、240ページ。

31) 鈴木秀一「井伏鱒二『山椒魚』の指導(中間報告)」、『教授学の探究』第8号(北海道大学教育学部教育方法学研究室、1990年)、6ページ。

しまう。人生の馬鹿げたことを寛容な目で眺め、不幸とか不遇というものも寛容な目で眺めてみると、むしろにっこりと笑ってしまう。それがペーソスを交えたユーモアの世界である。

ペーソスを交えたユーモアの世界は、山椒魚の悲劇を和らげるようでありながら、その働きとしては一層悲しさを引き立たせる。そしてその哀愁の色合いは決して激しいものではなく、ひたすら淡々と読み手の心に染み込んでくるようなものだ。「平静」な表現には笑いが漂うが、「動転した」心に涙が滲み込むほど、深みのある悲しさが複雑な形で浮き彫りにされている。向井敏のいうように、「『山椒魚』のおかしみ」は、「切ないユーモアに属するもの」³²⁾である。また、鈴木秀一は次のように語っている。

山椒魚の孤独感、絶望感とそれのもたらす悲哀を、そのまま直線的に読み手に受け取らせることを避けて、それをユーモアでくるみ、事態をやわらかく、ある距離をもって受け止めるようにしている工夫が二重、三重に仕組まれている³³⁾。

山椒魚の悲劇によって醸し出される、このペーソスを交えたユーモアの味わいが、読み手の心を自然にとらえ、読み手の共感を引き出す。この味わいは、作品の魅力を増すとともに、人生に対する一種の深い思索も感じさせてくれる。

この作品を読むことで、山椒魚の水底での心理や行動など、如何にもありそうに描かれている表現の素晴らしさを楽しみながら、山椒魚の気持ち、非日常的な行動や思索を自分なりに考えることができれば、と思う。そこに流れているものがなぜ読み手に強く共感できるのかを解いていくような授業ができれば、作品の豊かな世界により触れられる、と考える。

32) 向井敏『文章読本』(文芸春秋, 1989年), 132ページ。

33) 鈴木秀一「井伏鱒二『山椒魚』の指導(中間報告)」、『教授学の探究』第8号(北海道大学教育学部教育方法学研究室, 1990年), 8ページ。